

岩手県公立学校

退職校長会だより



第203号

発行／岩手県公立学校退職校長会
代表 吉川 健次

事務局／〒020-0126 盛岡市安倍館町

印刷／富士屋印刷所 019(637)6391

人生珠玉の日々

県副会長 菅原 壽

私は49歳から3年間オランダロッテルダム日本人学校で校長を務めた。あれから30年、傘寿を迎え、時の流れの速さに驚いている。そして当校での3年間は、私の人生の珠玉としてますます迫ってくる。



な励みで、この上ない幸せを感じたものである。着任した学校は、日米蘭、ロッテ市の協力のもと高級住宅街の一角に国際教育センターとして新設され、日米両校が入居した。シャワー付き理科室等の特別教室も完備する理想的な学校であったが、1ヶ月半後の新校舎落成式典に、

当時皇太子（現国王）アレキサンダー殿下のご来臨が予定されていた。私は、歓迎イベントの出し物を考案する必要性に迫られ、校内を物色して音楽室の1個の

ロッテ（ロッテルダムの愛称）近郊の邦人が住んでいない地の暮らしの中で、多くの方々から「どちらからおいでに？」と問われた。「日本から」と答えると、「へー、大きな国からいらしたのですね」と驚きの反応が返ってきた。日本が大きいと思ったことがない私は、中国と勘違いしているのではと問い直すのであった。国土が九州ほどのオランダの人々には、日本が大国にみえたのであるうか。また、当時の日本経済はうなぎ上りで、横浜港や神戸港の貨物取扱量は、長年世界一を自認してきたロッテ港に迫り、さらに、先端技術分野でも勢いがあつた。元氣な祖国の姿は、海外生活者には大き

和太鼓に着目した。これで何かができなにかと思案し、職員会議に提案した。幸いにも教員の一人が創作太鼓の、もう一人の教員が創作ダンスの経験があるとのことで、和太鼓と創作ダンスを組み合わせた出し物を披露することとした。和太鼓は、隣国ベルギーの日本人学校から借り受け、太鼓到着まではワイン樽で練習した。パチ作りなど学校を挙げて取り組み、創作太鼓と創作ダンスを組

み合わせた「ロッテマース河舞太鼓」（マース河はライン河のオランダ国内名）を一カ月で完成させた。いよいよ皇太子殿下の前での発表が行われた。エイヤーという力強い掛け声と共に決められた舞太鼓ポーズ。一瞬シーンと鎮まりかえった後、湧きおこった圧倒的な拍手喝采。殿下も喜ばれ、日本大使からもおほめの言葉を頂いた。無事に殿下をお見送りし、職員もPTA役員も涙ながらに喜びあつた。

私は、着任早々「花と絵と歌のある学校」という教育目標を掲げた。期待される国際人の前に真の日本人を育てる教育を目指した。又、隣接したアメリカンスクールとの交流も推進した。自然を愛し創造を喜ぶ優しい人間に育てたいと、全国からの職員とともに、児童生徒の多様な活動を展開させた。二年目には、教師と児童生徒の活動に一体感が生まれ、「花と絵と歌のある学校」の姿が見えてきた。

三年間はあつという間であった。苦労を共にした職員との交流は帰国後の今も続いている。嬉しい事は当時の職員3人がパリなど大都市の日本人学校の校長になったことである。赴任先の日本人学校を訪問し、校長室で話題が当時の苦労話に及ぶと、あの「舞太鼓」はオランダでの私達の取り組み全般を「鼓舞する」ものであつたと頷き合うのであつた。

安全・安心な学校づくり

岩手県小学校長会行財政部長
盛岡市立桜城小学校長

佐々木 寿 洋



令和7年4月より、岩手県小学校長会で行財政部の担当となりました。盛岡市立桜城

小学校の佐々木寿洋と申します。県小学校長会は、各部の活動の充実とともに、東北、全国の小学校長会や、行政、関係機関と効果的に連携しながら、教育課題の解決と校長としての資質の向上を図っております。本年7月3、4日に開催された第65回東北連合小学校長会協議会秋田大会においても、東北各地から校長先生方が参集し、校長としての教育的見識の高まりと教育課題の改善の方向性を見出すことができたと思っております。

桜城小学校は、令和7年度に創立117年を迎えた伝統校であり、学校教育目標「心の温かい思いやりのある人の育成」の達成に向けて、日々教育活動を推進しております。令和6年度からは、学校・家庭・地域・同窓会の四者の協働体制によるコミュニティ・スクールがスタートし

ました。確かな学力の育成、いじめ問題・不登校対策、特別支援教育の充実、情報機器の適切な活用等、学校には様々な課題があります。それらを解決するため、「あつたかハート」を合言葉として、子どもたち、そして四者の連携を大切にして取組を進めております。

課題の一つであるいじめの認知件数は増加傾向です。各自治体や各学校において、いじめ防止基本方針を改訂し、法の規定を踏まえた組織の設置、重大事態ガイドラインに沿った重大事態への対処等、必要な措置を講じてまいりました。いじめは、どの子どもにも、どの学校においても起こり得るものであるという認識のもと、適切な対応が必要です。いじめの早期発見や、早期対応は重要ですが、それらと同様に、本校では、学校風土の見える化と安全・安心な「あつたかハート」の学校づくりを通して、いじめの未然防止に力を入れております。

1 学校風土の見える化
学校風土の見える化の一つの方策

として、さくらフェストを作成し、四者で共有しています。さくらフェストとは、本校版の学びフェストです。学校教育目標の目指す子ども像を、知育・徳育・体育の三側面から示し、それぞれの課題の解決、改善に向け、教育活動や取組を重点化しました。さらに、学校評価や学力調査の結果を検証可能な数値目標として設定することにより、四者の役割を明確にし、学校風土の見える化を図りました。いじめ防止に向けては、「相手のことを考えたあいさつや正しい言葉遣いを身に付けさせる」ことを掲げました。学校は「進んで二言あいさつをしている」「友達を大切にしている言葉を使っている」に、家庭・地域・同窓会は「家庭や地域において、手本となるようにあいさつすることを心がける」に取り組み、学校評価によりその成果と課題を把握してまいります。

2 「あつたかハート」の学校

令和7年5月の児童会総会において、本年度の全校のめあては、「自分からだれにでも二言あいさつをして、思いやりあるあつたかハートな学校をめざそう」と決まりました。それに基づき、子どもたちは二言あいさつを行っています。二言あいさつとは、通常の挨拶に言葉を添える

というものです。例として、「おはようございます」に、「〇〇さん」という相手の名前や、「元気ですか」という気遣い、「一緒に遊ぼう」という誘い、「いつもありがとう」というお礼、「今日のうががんばろう」という励まし等、相手への思いやりを意識した言葉が挨拶の前後に添えられます。このように、温かい心で他の人を思いやることを継続することにより、そこに「あつたかハート」の学校が生まれ、いじめの未然防止にもつながると思っております。

子どもたち全員が安全で安心して学べる学校づくりを目指し、校長として努力してまいります。

今後とも、退職校長会の先輩の皆様からご指導ご助言を賜りますようお願い申し上げます。



教職員の働き方改革をめぐる取組について 考える「統合型校務支援システム」の導入

岩手県中学校長会副会長
遠野市立遠野中学校長

堀村 克利



岩手県教職員
働き方改革ブラ
ン(2024) 2026)では、
教職員を取り巻く

環境変化について以下の3つのことを
あげている。

- ・少子化の進行と子どもの抱える困難の多様化・複雑化
- ・教育DXの推進とその対応
- ・長時間勤務の教職員が多い実態と教員不足

そのために、働き方改革への具体的な取組として「学校の取組支援」「環境整備」「健康確保」「人材確保」等を設定している。今回は、「環境整備」「学校の取組支援」に関わって、昨年度から導入された「統合型校務支援システム」について、現状と課題を考えることとする。

1 統合型校務支援システムの導入

働き方改革として効率的な業務を進めることで、より児童生徒への学習指導や生徒指導等に向き合っていくために、本県では、令和6(8年度)にかけて公立小中学校・義務教育学校で、市町村ごとに順次「統合型校務支援システム」の導入が始まった。目的は以下の2つである。

ア 教育活動の質の改善

児童生徒の学力や日常的な行動の記録、心身の健康状態などの多様な情報を、校内での一元管理・共有・発信・受信することにより、データ分析等による指導改善等に役立て、教育の質的な向上を図る。

イ 業務の軽減と効率化

「手書き」や「手作業」が多い学校現場の業務改善を図る観点で有効であり、成績のデータを通知表や指導要録に自動的に引き継ぐことや、転記にかかる時間や転記ミスを著しく減少させることで業務の正確性が向上する。学校現場からも県内での統一を求める声があり、同じシステムを利用することにより、教職員の異動にかかる業務の引き継ぎや理解に要する時間の短縮、教職員の作業的負担の軽減を図る。

今までも学習成績等の管理、通知表作成等の校務システムは、各市町村や学校で独自のものが導入されていた。しかし今回、全県で統一したシステムの導入により児童生徒の学習成績や健康管理等を行うだけでなく、グループウェアによる学校や教職員のスケジュール管理、出勤管理、文書の送受信や管理等がで

きるようになった。

2 統合型校務支援システムの導入による学校現場の現状と課題

私が勤務する遠野市の小中学校では、令和6年度からの導入となった。導入の際には前年度の3学期よりオンラインによる研修が行われ、市内で生徒数が一番多い遠野中学校では市教育委員会の担当者が在校生の基本データを入力する等、可能な限りスムーズな導入ができるような動きがとられた。また、それまで使っていた校務システムの書類のPDF化やデータ化等も行われた。

ア 統合型校務支援システムの導入の成果

- ・全県共通のプラットフォームで学習成績の管理等を行うことができ、通知表の様式も基本的に同じものなので、転勤の際も同じように仕事ができることから、転勤時のストレス感が緩和される。
- ・小学校から中学校への入学の際、児童の名簿をはじめ基本的な情報が校務支援ソフト内で行える。
- ・県内であれば、転出入の指導要録のやり取りが校務支援ソフト内で行える。
- ・学校日誌のデータ化と内容の統一化により、記入の際の時間が軽減される。
- ・学校や教職員のスケジュールが一元的に管理され、教職員の予定をお互いに把握できる。
- ・出勤のオンライン化(出勤簿押印の廃止)により、教職員の勤務時間の管理、長時間勤務の軽減に

役立つ。役立てられる。

- ・メッセージ機能により効率的に文書のやり取りができ、掲示板機能では県教育委員会等から必要な情報を得られやすくなる。
- イ 統合型校務支援システムの課題
使い慣れたシステムからの切り替え時に、使い勝手の違いや、過去のデータをそのまま活用できず、導入当初は困難が生じた。また、機能面で使いにくい面(例・担任による出欠と養護教諭による健康観察の入力の問題、名簿管理の柔軟性にかけること、マニュアルの分かりにくさ等)が散見される。次回のシステム更新時での改善を期待したい。

3 まとめ

「統合型校務支援システム」は、授業でのタブレットの活用や文書の電子化とともに、教育DXの推進の一環であると考え、私達教職員は「習うより慣れる」の姿勢を持ち、そのための手段として使う機会を数多くすることが必要である。それにより、教職員の働き方改革が推進されると同時に、令和の日本型学校教育が構築されると考えている。

令和7年度 岩手県公立学校退職校長会 第1回 事務局長会議

・期日 令和7年8月21日(木) ・会場 サンセール盛岡

令和7年度第1回事務局長会議は、8月21日(木)午前11時から、吉川健次会長をはじめ各地区会事務局長と常任理事の出席のもと開催された。

事務局長会議次第

- 1 開会の言葉 菅原壽副会長
- 2 会長挨拶(要旨) 吉川健次会長
県内各地からお集まりいただきありがとうございます。本会は、16地区によって構成されており、そのうち、4つの地区で事務局長さんが新しく就任されました。事務局長は各地区会活動の推進役を担う重要ポストであります。どうぞよろしく願います。

- 3 紹介
(新事務局長、新総務部長、新厚生部長、新常任理事)
- 4 議長選出
澤藤耕平氏(和賀地区会)
- 5 会務報告(館澤卓宏県事務局長)
- 6 協議
【協議1】 結成60周年記念大会第51回県研修・親睦会「盛岡大会」について
大会テーマ「明日に向かって豊かに生きる」先人をたずねて」のもと、9月18日(木)・19日(金)の二日間盛岡つなぎ温泉「ホテル紫苑」において、190名ほどの参加のもと開催予定。1日目は記念式典、児童生徒発表、記念講演、記念祝賀会。2日目は閉会行事後、5か所に分かれての見学研修を予定している。
- 【協議2】 会員数の推移と新加入者状況及び会費納入免除会員について
会員数は、この10年間でおよそ200名減少している。学校の統廃合が進み、校長数自体が減少していること、高齢化による逝去会員が多くなってきていること、また、加入率が80%台となり、未加入者が多いこと等が原因として考えられる。こ

のことは、財政基盤へ大きく影響し、本会の活動の見直しを迫られている。現職校長会との交流を通して、お互いの理解を深めていく必要がある。現在、会費納入免除者は40名ほどとなっており、原則地区会で決定する。その際は、本部との連絡を密にしていきたい。

回県研修・親睦会「盛岡大会」の祝賀会での取組と事務局を担当している「いわて教育の日」推進協議会20周年記念誌の発行がある。また、今年度の「いわて教育の日」のつどいは、11月10日(月)を予定している。

- 【協議3】 令和6年度末校長職退職者の未加入状況調査から
令和6年度末校長職退職者の未加入者について、調査を行った。その結果、たぐさんの理由が挙げられたが、まとめると、「退職と同時に、一旦、教育の世界から離れたくない」「退職後、再任用として現場に残るので、退職の実感がない」、「居住地以外の学校で退職したので、いろいろな理由でその地区の活動へ参加しづらい」、そして、「退職校長会の活動に魅力を感じない」となる。改善できる点もあるが、本会としては、「活動に魅力を感じない」ということに対し、真摯に反省し、魅力ある活動を推進していく必要がある。
- 【協議4】 令和8年度上寿・米寿対象者について
7月12日現在、令和8年度の上寿対象者は2名【大正15年(1926年)4月2日から昭和2年(1927年)4月1日まで】に出生、米寿対象者は34名【昭和14年(1939年)4月2日から昭和15年(1940年)4月1日まで】に出生している。
- 【協議5・6】 厚生部の事業推進計画について並びに「いわて教育の日」の推進状況について
今年度の厚生部推進事業は、例年に加えて、結成60周年記念大会第51

- 【協議7】 逝去会員の情報連絡等について
逝去者の報告の遅れや未報告事案があり、対応に苦慮している地区会がある。世話役さんや班長さんなどの日頃からの情報収集をお願いしたい。この頃は、新聞に掲載しないことや家族葬で行う場合も多くなってきた。そもそも、退職校長会への連絡すること自体がわからない場合があるので、何らかの方法で情報提供していくことも大切である。
- 【その他】
① 令和7年度現職・退職校長会幹部懇談会から
県小学校長会・中学校長会から学校現場で現在抱えている諸課題が多数出された。詳細は8ページに掲載。
- ② 第51回東北地区退職校長会協議会「山形大会」について
10月9日(木)・10日(金)、山形市において2日間開催される。吉川会長他3名出席予定。
- ③ その他(各地区会から)
各地区会からは、地区会活動の現状や課題等が出された。

8 7 連絡 閉会の言葉 菅原壽副会長



わたしの3・11

盛岡地区会

大西 洋 悦



平成22年度に校長として初めて山田町立山田北小学校に赴任しました。のどかな山漁村と新興住宅地が共存する山田北小学区、元気で純粹で頑張り屋の子供達、気性は荒いが心は温かく学校に対してとても協力的な保護者や地域の方々、様々な交流を通じてすぐに仲良くなりました。また、若手とベテランがマッチして意欲的に教育活動に取り組む教職員、そんな環境の中でとても楽しく充実した一年を過ごし、次年度もさらに充実した学校経営を進めていこうと思っていた矢先の平成23年3月11日、あの

大震災津波が襲来しました。あつという間に地域の尊い人命や大切なものやこと、そして、私の思いも奪いついていきました。

その日体育館には、地域の方々300人余り避難してきました。夜には理科室にあったローソクを灯し、器具室にあったマットや段ボール等を出して横になってもらいました。教職員は2時間交代で体育館の

火の監視にあたり、監視以外の教職員は仮眠をとりながら職員室で待機していました。窓からは山田の中心街が爆発を繰り返す大きな炎を上げながら燃え続ける様子が否応なしに目に入ってきました。暗闇の職員室から見えるその光景は中学生の時に見た「日本沈没」という映画の一場面のようでした。でも、映画ではなく紛れもなく現実の光景でした。周りからすすり泣く声も聞こえませんでした。

次の日からは、親と帰った子供の安否確認に奔走しました。別の避難所等で次々と所在が確認されましたが、二人の子供だけは元気な姿で再会することは叶いませんでした。避難所の対応も行いました。トイレの掃除をしたり、トイレ使用後に流すための水をプールから何度もバケツで運んだりしました。教職員は献身的に動いてくれました。避難所では保護者の人達が食事係を率先して担当し避難所の食事の世話をしてくれました。職員室等で寝泊まりしている私たちの食事の面倒も見てくださいました。避難所は7月末まで続き

ました。何日か経った頃、幼馴染が突然に学校を訪ねてきました。「生きていたが？」と、微笑みながら懐かしい田舎の言葉、生まれ故郷の青森県五戸町から私の生死を確かめなければ

ばという一心で駆け付けたということでした。その姿に言葉が出ませんでした。また、大学時代の部活の先輩、若き頃公私にお世話になった先生方、元同僚や上司なども心配して遠くから訪ねて来てくださいました。発災から数日して携帯のアンテナが立つ場所に行ってみると数十件のメッセージが入っていました。その中には妻からのメッセージもありました。「自分たちは無事だから心配しないで」「あなたの無事も信じている」などの言葉が記されています。すぐに電話し、「自分帰れない。子供や地域のためにできる限り頑張る。メールをくれた人たちに無事を伝えてほしい」と話し、妻からは、「生かされた身、校長として子供や地域のために力を尽くしてほしい」と言われました。

学校には、たくさんの方々の学校関係者や関係機関等の方々や避難所の運営のお手伝いに来てくださいました。また、県内外及び外国のたくさんの方々から物資支援や励ましをいただきました。

学校では、卒業式を3月23日に、4つの避難所に向いて行いました。卒業式には避難している方々も参列してくださいました。過卒生がフルートで校歌を演奏してくれました。卒業生にケーキを用意してくだ

さったりと温かく卒業生を見守り祝福してくださいました。

新年度の第一学期始業式は、例年より2週間遅れで4月21日に、入学式は翌22日に行いました。始業式の前の晩、職員室で数人の教員と打ち合わせをしていると、「今日だけはいいんだ、先生飲むべ」と言って保護者の方が缶酎ハイを持ってきてくれました。職員室の中で酒を飲むことに後ろめたさを感じましたが保護者の心意気に感謝し祝杯を挙げました。久しぶりに飲んだ酒、すごく冷たくてそれまでに飲んだどの酒よりもうまかったです。学校を再開できる喜びをみんなで共有しました。

それから2年間、子供達と共に、明るく、元気に教育活動を展開しようとして躍動する教職員の姿、被災して苦しい生活を送っているのに学校や子供達を応援してくれる保護者や地域の方々やの温かい支え、教育長や教育委員会の方々の強固なサポート、町外の学校との心温まる交流など、たくさんの方々の方々の励ましと支えがあつて「新生山田北小学校」を力強く前進させていくことができました。改めて関わってくれた皆さんの皆さんの心から感謝いたします。

(元山田町立山田北小学校 校長)

わたしの3・11

花巻地区会

藤館 茂



判断を支えた学び
平成22年4月に
釜石市立唐丹中学
校へ赴任。最初の
市校長会議で、震

災直後の判断を支えた学びがありました。「三陸沿岸に大津波が来るとしたら、地震発生30分後」。この話を受けて、地震があれば即時計を見ても、30分で何ができるかを考える習慣が身についたのです。そして、あの日の判断・行動は30分後の「15時16分」を強く意識したのになりました。

防災マップづくり

唐丹中学校は全ての教室から唐丹湾を眺めることができ、昭和40年代後半までは船で通学する生徒もいました。体育館は津波の避難所になり、防災教育も充実していました。震災前年の9月には、釜石市の遊覧船「はまゆり」に全校生徒が乗船し、防災マップづくりに努



「はまゆり」から見た唐丹中学校

めました。半年後、その「はまゆり」が大槌町の民宿の屋根の上に流されたこと知った時には本当に愕然としました。

揺れが収まる前に避難

平成23年3月11日14時46分、これまで体験したことのない激しい揺れを感じました。校長室の大型金庫が動き、壁に亀裂が入ったため、このまま校舎内においては危険だと判断し避難を指示。校庭への避難完了が14時53分頃。その後、避難してきた地域の方々と一緒に国道45号線まで移動。私は一人残り、避難してくる方々に「こどもたちは国道まで避難しました。立ち止まらずに行ってください」と連呼。

15時20分頃、12・5mの防潮堤をなぎ倒した津波が家屋や車をのみ込んで学校に向かってきたのです。何が起きているのか、これは現実なのか、信じられない状況でした。

師弟同行の三日間



倒壊した防潮堤

生徒たちは、国道脇に工事のため建てられていたN.T.Tの仮設事務所で先生方と過ごすことにしました。全ての生徒を親元に引き渡したのは3日目の昼頃。その間、先生方は昼

夜を通し誠心誠意生徒に寄り添っていたのです。自分の家族も心配なのに、敬服するばかりでした。3月13日に帰宅した先生方は、前任校や知人からの支援物資を届けるなど、常に前向き、精力的で、その後もまさに「お釈迦様の指」のごとく生徒や学校、地域を支え続けたのです。

ご遺体を預かり

私は、その後も学校に残り、出張中だった二人の職員の安否を確認。学校の状況を教育委員会に報告するため、携帯電話の電波が入るところまで移動。その後、ご遺体をお預かりすることになり、線香とろうそくの火を絶やさないようにしながら、時には真夜中に訪ねてこられる方々をご遺体安置の場所に案内していました。

トモダチ作戦と生徒の姿

本格的に救援物資が届き始めたのは6日後。アメリカ海軍ヘリによる救援活動でした。海軍の方々は、ヘリコプターから体育館まで並び、整然と物資を手渡し、救援活動に参加している生徒の姿に感嘆していました。

体育館教室

校舎が使えなくなり、体育館で授業を



体育館教室

再開しましたが、生徒たちは誰一人として不平や不満を言いませんでした。とても辛く悲しかったはずですが、心が休まる時がなかったと思います。でも、思い通りにならない日々を過ごす中で生徒たちは逞しく成長し、頑張り抜くことで地域の希望となったのです。

宝石のようだ

横軸連携により、花巻から届いた鉛筆・消しゴム・ノートを手にした中学三年の女子生徒が言いました。「宝石のようだ」と。

唐丹小中復興大運動会

震災後初の行事となった九月の小中合同運動会。隣町にある野球場を会場に、地域の方々を招待し開催しました。お世話になった大阪府警の皆さんも参加して盛り上げてくださいました。最後に踊った「唐丹ソーラン」は地域の皆さんを勇気づけることができたと思います。

世界中の優しさに支えられ

「支えられた人から支えることのできる人になる。本当に強い人は優しい人」と言う、全校生徒たちの笑顔を忘れません。

(元釜石市立唐丹中学校 校長)



唐丹ソーラン

わたしの3・11

遠野地区会

菊池 和子



2011年3月11日。立ってられない揺れと引き波にさらわれてい

く家々、今まで見たこともない光景を前に言葉も出なかった。その日から、私達教職員も安渡小学校の避難所で余震に悩まされながら、これから先の生活を考えなければならぬ不安を抱えた日々を過ごさなければならなかった。子ども達の避難先や被害状況の確認、学校再開への道筋、避難所としての学校管理等々たくさんの仕事をする中で頭や体を疲れさせ、不安を遠ざけていた。3月29日、温かい支援や指導のお陰で、校庭で青空卒業式を行い一つ荷を下ろすことが出来た。4月20日始業式、25日入学式を行い新年度をスタートさせたが、すぐ吉里吉里小学校への移動、仮設校舎への移動とめまぐるしい半年を過ごすことになった。

2012年に仮設校舎の4小学校が閉校し、新生の大槌小学校になることが決まった。安渡小学校として

の最後の卒業式を仮設校舎の体育館で行った。式場には、安渡小学校の校庭に咲いた桜が飾られ、子ども達の門出を見守っていた。私は、子ども達のこの1年の学びと成長を思うと、式辞の言葉が続かない場面もあった。

以下は式辞からの抜粋である。

震災により人の命・家や遊び場そして学び舎を失い、今まで当たり前だと思っていたことが、当たり前でなくなりました。そんな光の見えない生活の中「学校で勉強をしたい。本を読みたい」という6年生の声を聞いた時に、私は本当に嬉しくなり、早く学校を再開したいと思いました。

大槌町教育委員会が発行している作文集に「私は、震災で水道の出ない生活の中、沢から手洗い用の水くみを友達とやりました。寒い時は水が凍っていてとても大変だったけれど自分も役に立つことが出来て嬉しかったです。これからも身の回りで自分に出来るようなことに挑戦していきたいです。」と綴った6年生がいます。避難生活の中で、水くみやゴミ拾い、小さい子ども達の遊び相手やお年寄りの話し相手など、小学生は小学生なりの役割をしっかりと果たそうとする6年生の皆さんが、とて

も頼もしく見えました。(中略)

5年生の時、大切な仲間を失い、悲しみのどん底に突き落とされました。励まし合い、助け合って乗り越えようと頑張っていた矢先、震災に襲われました。6年生として一番楽しみに待っていた修学旅行もその実施が、危ぶまれました。しかし、たくさんの方々の力で実施が決まった時に、「校長先生、修学旅行に行かせて下さって、ありがとうございます。」と一人一人から、それぞれの感謝の言葉をもらいました。そして、修学旅行先で知り合った、埼玉県の老人クラブの皆さんとの交流は、今も続いています。遠く離れたところにも、自分たちを孫のように気遣って下さる方々に感謝し、しっかり勉強しようとする姿は、とても輝いていました。

子ども達は、人との繋がりの中で生かされていることを学び、また、学んだことを自分の行動で示した。下学年がそれを手本としたことは言うまでもない。支援金や支援物資が届き活用させていただいたが、「人との繋がりを大事にする心」をいただいたことが大きな宝となった。

震災時、私も人との繋がりによって生かされた。気は張っていたが体は正直で熱が出た。大阪の医療チー

ムの先生から「今無理すると後が大変ですよ」とアドバイスを受け、安渡小学校臨時診療所での点滴第1号の患者になったのであった。針金のハンガーを使って作ったスタンドもどきを使って治療を受けた。「校長先生のお陰で、私たちがこんな器具を開発することが出来ました。何でも使い道があるものですね。」と言ってくれた。それぞれの役割を頑張る子ども達と様々な場面で指導や教材を工夫する教職員の姿と重なった。大阪の医療チームの先生方は基金を創設し、10年間も子ども達を支援して下さいました。

学校が前へ進むことが出来たのは、たくさんの人と繋がりが、支えがあったからこそであり、今も感謝でいっぱいである。子ども達と芸能人やスポーツ選手等の出会いがメディアで取り上げられたが、消防や警察、自衛隊等過酷な活動を強いられただ方々との出会いは、最も鮮明に子ども達の心に入り込んだのではないだろうか。

子ども達が出会いを通して学んだことを生かし、そして何よりも「人との繋がりを大事にする心」を未来へと繋いでくれると確信している。

(元大槌町立安渡小学校 校長)

令和7年度 現職・退職両校長会幹部懇談会

7月30日(木)、岩手県小学校長会、同中学校長会(各3名)、本会から、会長・副会長・各部長・事務局長・同次長の出席により「現状と課題」「教育懇談会の持ち方」について意見交流がなされた。

話題となった主なものは、小学校長会からは、▽校長会員数(10年前に比べ80人の減)、▽今年度の閉校は5校、▽心身の要サポート率は震災発生当時と同程度となっている、▽教員関係では、60代教員の増加による若年層との二極化、加配教員の欠員や産休育休取得に伴う補充者の確保が難しい、▽校長に昇任する年齢が高くなり、退職校長と触れることが少ない、▽統合型校務支援システム導入への対応等が出された。

中学校長会からは、▽部活道の地域移行がうまく進んでいない、▽そもそも、部活動の目的から、部活動を学校から切り離していいのかと考える。早く道筋を示してほしい、▽来年度から特色入試の全校実施が行われるが、子どもの負担が大きいのではないか、などが出された。この後、活発な意見交流が行われた。

教育懇談会は、現職にとって、講話等大変有意義であった。参加への積極的な呼びかけを行うなど工夫し、今年度も是非開催したい。

編集後記

「真夏日」「猛暑日」、ついに「酷暑日」なる言葉も聞かれた今年の夏である。中学生や高校生も、ハーフパンツやTシャツ姿である。窓から見える通学風景である。夏の制服を着るには暑すぎるということなだろう。

さて、各地区会活動の推進役として新たに4名の新事務局長を迎え、第1回事務局長会議が開催された。今年度の活動や本会が抱える課題について共通理解が図られた。

学校経営における取り組みや課題等について、現職校長会より、盛岡市立桜城小学校長の佐々木寿洋様、遠野市立遠野中学校長の堀村克利様から玉稿を頂いた。また、「わたしの3・11」では、盛岡地区会大西洋悦様、花巻地区会藤館茂様、遠野地区会菊池和子様より、貴重なご寄稿を頂いた。お忙しい中での取り組みに感謝の気持ちでいっぱいである。なお、今号は岩手県内全小中学校長へも配付することとしている。

本会の会員数は年々減少傾向にある。また、新規加入もいろいろな理由、事情により100%にはならない。会員数の減少は活動にも影響するなど、本会を取り巻く状況は大変厳しいものがある。こんな時だからこそ、現職校長会と本会がお互いの理解を深め、意思疎通を図っていききたい。お互い、健康には留意し、さわやかな秋を迎えたいものである。

岩手県公立学校退職校長会

郵便振替口座番号

02300-7-24952

第一面の本会報題字は
故白木龍竹氏の直筆による